

り、抜け落ちているところがあったりと、完璧ではありえません。ですから、工事関係者、施設管理者、使用者の全てが再度安全に関する見直しを図り互いに率直な意見を交換し、『緩んだ螺子を締めなおす』必要があるのではないのでしょうか。

せかせかとしがちな現代生活の中で、ゆるやかな時間に身を任せる生活を楽しむためには、矛盾するようですが、締めるべきところは締め、緩めるべきところで緩める術が求められているように思います。  
(アトリエ レッズ)

## 遊ぶ子供の声聞けば……

植木 朝子

平安時代末、京都の人々を魅了したはやり歌があった。これまでの歌謡に比べて、目新しく華やかな魅力をもっていたために「今様いまさま」と呼ばれた

歌々である。今様を愛した時の権力者後白河院は、その詞章を集めて『梁塵秘抄りょうじんひしやう』を編んだ。この書名は次のような故事によっている。すなわ

ち、中国に、虞公と韓娥という美声の持ち主がいたが、彼らの歌声は、梁のまわりを三日間響き巡り、また梁の上の塵を動かすほどのものであったという。

この「梁塵」の名を冠した今様集の中で最もよく知られているのは、次の一首であろう。

遊びをせんとや生まれけむ

戯れせんとや生まれけん

遊ぶ子供の声聞けば

わが身さへこそ ゆるがるれ

遊びをしようとしてこの世に生まれてきたのであるうか、それとも戯れをしようとして生まれてきたのであるうか、無心に遊んでいる子どもたちの声を聞いていると、自分の体までが自然と揺れ動きだすように思われるよ——老境に達した人

が自分の境涯を顧み、童心にあこがれる心の綾を、はずむような律調にのせて歌う美しい一首である。遊女が自らの境遇を顧みて、身を揺るがす悔恨を歌ったとする説もあるが、歌の主体を遊女に限定する必要はなく、ある程度の人生経験を積んだ大人の感慨と考えたい。

この今様は、主体を大人一般と見るか、または自らの罪を意識している遊女と見るかで議論が繰り返されてきたが、その中で、遊女説に立ちつつ、「ゆるがるれ」を「揺るがるれ」ではなく「緩るがるれ」とする論が提示されたことがある（藤原正義「今様「あそびをせんとや」——その発想と表現」『日本文学』第二〇巻第三号 一九七一年三月）。遊んでいる子どもたちの声を聞いて、自然と心が安らいでくると解するのである。「ゆるがるれ」は四段動詞「ゆるぐ」の未然形に自発の助動詞「る」の已然形「るれ」が接続

したもので、上の「こそ」と対応した強調の係り結びになっている。「ゆるぐ」という四段動詞としては、揺れ動く意の「揺るぐ」を考えるのが普通だが、藤原論文は、ゆったりとくつろぐ意の「緩るぐ」を当てている。問題は四段動詞「緩るぐ」の用例が『大鏡』の一例しか知られないことで、「緩るぐ」説を積極的に支持するにはやや不安が残る。『大鏡』の例は「兄殿は、いとあまりうるはしく、公事よりほかのこと、他分には申させたまはで、緩るぎたる所のおはしまさざりしなり」というもので、源雅信の人物評として「あまりに端正で、朝廷の政務のほかのことを余計にはお話しにならず、ゆったりとくつろいだところがあまりにならなかつた」という箇所である。

冒頭の今様に戻って考えるに、「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん」というはずんだ律調や、「遊ぶ子供の声」として想像し

得るにぎやかさからは、気持ちが安らぐというより、はずんだ気分になり、体さえも動きだしそうになるという方が自然ではない

か。先に「揺るぐ」として解釈した通りである。

『梁塵秘抄』の注釈史においても、「揺るぐ」が通説となっており、藤原論文を支持するものはその後も見当たらない。

さて、これまでにいくつかの大学の授業でこの今様について話す機会があつた。「揺るぐ」「緩るぐ」二通りの説のあることを説明したあと、受講生自身の考えを書いてもらうと、意外に「緩るぐ」説を支持する学生が多い。遊ぶ子どもの声によって気分がはずんでくる、というよりも、二度と戻れない子ども時代への喪失感からどちらかと



いうと静かな諦観ともいうべき心境に至ると感じるようなのである。そこまでいくと「ゆったりとくつろぐ」という「緩るぐ」の意味からも逸脱していくのだが、学生時代の終わりが見えてきたところで将来の不安におびえる彼らは、無邪気に遊んでいられた子ども時代を懐かしみ、この今様から失われた時への哀愁を強く感じとっているらしい。そうした文章を読むと何やら痛々しいような思いにもとられる。一方、興味深いのは、年配の受講生がほぼ「揺るぐ」説を支持することである。私の出会った社会人受講生は女性が圧倒的に多かったが、彼女らはこの今様から子どもと一緒に遊びだしそうになる明るさを感じとり、子育ての経験などを交えながら、子どもの遊びの躍動感を生き生きと記してくれた。

こうした受け止め方の違いは、年齢によるもので、今の若い学生たちが人生経験を重ねた後には

「揺るぐ」説を支持するようになるのだろうか。それとも、社会全体の気分として「揺るぐ」説は片隅に追いやられ続けるのだろうか。子どもの数が減り、その遊びも、屋外の集団的な活動から、屋内の少人数での静かなものへと変質していると言われているが、「遊ぶ子供の声」そのものが実感をもつて捉えられない時がもしやってきたならば、冒頭の今様はどのように理解されるだろう。

それでも、幼稚園や保育園のそばを通るとき、子どもたちの高い声が響いてくると、「遊ぶ子供の声」の普遍性を思う。そしてその声は私達に様々な感慨を催させるものであることを改めて思う。今様一首の解釈という問題からいったん離れてみると、子どもの声を耳にした時、大人たちはわくわくしたり、元気になったり、優しい気持ちになったり、郷愁にかられたり、感傷的になったりする。身体は子どもたちと一緒に揺れ動きだ

し、一方、心は大人社会で強いられている緊張が緩んで、ゆったりとおおらかになるという場合もあろう。「揺るぐ」と「緩るぐ」は私達の中で、

隣合わせに共存しているのかも知れない。

(同志社大学)

## ゆるむからだの息づかい

郡司 明子

近頃、「ゆるい喫茶店」が姿を消しつつあることを耳にしました。ある人は本を読み、ある人は商談をし、またある人は、談話に花を咲かせる。コーヒー一杯で、何時間でも腰を落ち着けていら

れる場所。そんなゆるみのある空間がなくなってきたと。一方、素早い対応を売りに、客の回転を優先すべく、固い椅子で、適当な居心地の空間を演出するコーヒーショップ。長居する気にはなれ